

十二指腸潰瘍の自然史

浜松医科大学 第1内科
金子 栄蔵

胃集検で発見された十二指腸潰瘍(以下DU) 1,071例を投薬せずに6カ月毎の内視鏡検査で追跡した。集検DUは病院症例に較べ活動期潰瘍が少なく、H₂期潰瘍が多い。集検DUの1年間の経過では、初回オープン潰瘍の約4分の1が癒痕化し、初回癒痕であったものの約4分の1が再発した。単発潰瘍と多発線状潰瘍では明らかに異なる経過を示し前者が有意に治癒傾向を示し、また再発も少なかった。S₁期とS₂期の再発率は前者が有意に高かった。

4年間の自然史で、初回活動性潰瘍の58%が少なくとも一度は癒痕化した。うち単発潰瘍の癒痕化率85%に較べ、多発線状潰瘍のそれは47%で後者が有意に低値であった。初回H₂ステージ潰瘍で発見されたもので4年間に一度でも癒痕化したものは40%で、これは初回活動性潰瘍の治癒率よりも低値であった。H₂期の多発線状潰瘍の治癒率は30%に過ぎなかった(Figure 1)。初回S₁期癒痕は4年間に53%が再発した。とくに多発線状潰瘍の再発率は70%に達した。S₂期の再発率は15%とS₁期に較べ有意に少なく、多発線状潰瘍でも再発率は29%であった。

この4年間に6例の顕出血症例があったがいずれも保存的治療で改善した。2年間の潰瘍の活動性を経過中A、あるいはH₁ステージの活動性潰瘍となったA群、H₂ステージ以上には悪化しなかったH₂群、終始癒痕だったS群と分類し背景因子を検討した。その結果治療の既往のあるもので2年間の潰瘍の活動性が高かった。喫煙者は非喫煙者に較べ有意にオープン潰瘍の頻度が高く、とくに喫煙者の半数がH₂群であった。飲酒、コーヒーとの関連は認められなかった。

血清ペプシノーゲン(PG) Iはコントロール群に較べ十二指腸潰瘍で有意に高かった。またA群、H₂群いずれもコントロール群より有意に高値だが、S群の値はコントロールと差がない(Table 1)。PGIは十二指腸潰瘍の活動性とも関連していることが示唆された。さらに単発潰瘍のPGI 59.7±2.3に対し多発線状潰瘍のそれは73±1.6で、後者が有意に高値であった。喫煙との関連ではA群、H₂群では喫煙者と非喫煙者の間に差がないが、癒痕群では喫煙者で有意に高くなっておりPGI値は喫煙とも弱い相関が認められた。検診例の初回検査の年代別病期をみると、60歳代に潰瘍の活動性が低下していた(Figure

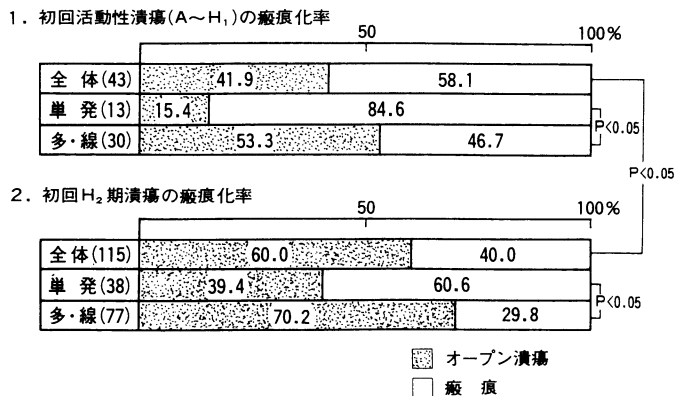


Figure 1 4年間経過追跡例の内視鏡所見

Table 1 健常コントロールと十二指腸潰瘍症例の血清 PG I, II 値

	例数	PG I (ng/ml)	PG II (ng/ml)
コントロール	189	57.9±1.9	16.5±0.8
十二指腸潰瘍			
全体	399	69.4±1.4***	18.0±0.5
A 群	127	72.9±2.6***	17.6±0.9
H ₂ 群	160	73.5±2.1***	19.2±0.6*
S 群	112	59.5±2.1	16.7±0.7

*** : p<0.0001, * : p<0.01 (対コントロール) (mean±S.E.)

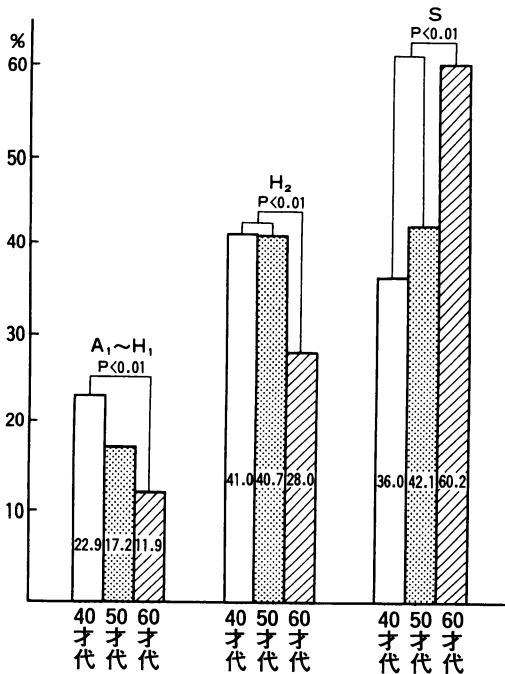


Figure 2 40 歳代, 50 歳代, 60 歳代以上各年代の潰瘍の活動性 (n=1071)

2). 追跡例で 40 歳代から 50 歳代へ,あるいは 50 歳代から 60 歳代へと, 2 世代にわたって経過を見た 150 例で潰瘍の活動性がどの様に变化したかをみた。活動性潰瘍は次の年代で減少し, 一方癒痕は加齢, とくに 50 歳代から 60 歳代への移行でその頻度の増加が著明であった。70 歳以上の十二指腸潰瘍 149 例で既往に十二指腸潰瘍と診断されていたものは 35 例に過ぎず, 過半数が新発症と考えられるものであった。

まとめ:

1. 多発線状潰瘍と単発潰瘍の経過は明らかに異なり,

両者は成因を異にしている可能性がある。

2. H₂期の多発線状潰瘍はきわめて長期そのままの状態経過するものが多い。

3. S₁期癒痕と S₂期癒痕では再発率に著しい差がある。

4. 高血清 PGI は, 十二指腸潰瘍のハイリスクだけでなく, 潰瘍の活動性にも関与している。

5. 十二指腸潰瘍の活動性は, 発症からの年数よりも, ある年代に至って低下すると考えられる。とくに 60 歳以降に活動性の低下が急速に進む。

6. 高齢者の十二指腸潰瘍は, 家族からの孤立, 基礎疾患, 薬剤などの影響によって新たに発症するものが多い。

DU の病因は決して単一なものではなく, 遺伝, 環境などが複雑に絡み合っている heterogeneous な疾患と考えられる。それらの自然史を明らかにすることによってはじめて維持療法を何時まで続けるかという問いに回答が得られると考えている。

NATURAL HISTORY OF DUODENAL ULCER

Eizo KANEKO

Hamamatsu University, School of Medicine.

In a gastric mass survey with photofluorography performed on 22,313 male office workers over 40 years of age, 1,071 cases of duodenal ulcer (DU) were detected. These cases were scheduled to be followed up every 6 months with endoscopy and without any anti-ulcer drugs. We are able to follow up 624 cases for 1 year and 251 cases for 4 years.

The ulcer activity during this period was analyzed in connection with each cases' background. One fourth of ulcer with crater at initial endoscopy were healed, and one fourth of ulcer scar relapsed at 12 months. During 4 year follow-up period, 58% of active DU at initial examination healed at least once, and 53% of red scar and 15% of white scar at initial examination relapsed. Multiple and linear DU showed significantly less healing rate and more relapse rate than single DU.

Regarding the relative risks, the cases with a history of previous treatment, amoking and high serum pepsinogen I showed higher ulcer activities during trial period.